

守田

ご紹介にあずかりました守田です。座ってお話しさせていただきます。今日は先ほどもお話にありましたように、こちらで1時間ちょっとほどお話をしてから、今、外でちょっと現地を歩いてみたいというふうに思っております。ただちょっと今、雨が心配ですので、そうになりましたらこちらですとお話をするっていう格好にしたいと思います。話題はいろいろとございますので、短い間ですが、おつき合いのほどよろしく願いいたします。私は高松に来てまだ、ちょうどもう少しで3年たつぐらいです。したがって地域の細かい事情であるとか情報については、恐らく皆さんのほうが(笑)、お詳しいところもあるかと思います。今日お話しして、何かお気づきの点とかご教示いただける点、ございましたら、いろいろとお話しただけたらというふうに考えております。私はもともと専門が、日本中世史の土地制度とか地域社会史とか、あるいは***ちょっと手広くいろいろとやっているんですけれども、基本的には土地と人とかかわり方っていうのについて非常に興味を持っております。こちらに3年前に赴任したときも、まず私が高く(?) 掲げたい(?) などというふうに思っていた仕事というのは、やっぱりこの善通寺さんに関する仕事です。もう全国的にも、もちろん弘法大師さんの生誕の地ということで著名になっておりますが、それとともに、たくさん非常に重要な文化財というのが、貴重な文化財というのがたくさんあるということで、これ研究者の間でも大変有名なんです。ですからぜひとも、こちらに来たときに、まずこちらの善通寺さんのことをずっと考えたい、いうふうにかねがね思っておりました。今日はその善通寺さんの資料と、着任してからいろいろと拝見して新しくわかったこと、そしてこれからやっていかなければいけない、できることなんかをお話ししていけたらというふうに思います。で、ちょっとレジュメについて少し補足をしてお話しすることがございます。本レジュメが2枚ございます。それから絵図ですね。こちらが今日の話題の中心になる資料ですね。鎌倉時代に描かれた***、善通寺周辺の絵図、それからトレース図をお配りしております。こちらのほうは、適宜、絵図と比較しながらご参照いただきたいと思います。こちら、トレース図の出典についてですね。

(間)

守田

ごめんなさい、***の参考文献に、本レジュメ(?)の2枚目になります参考文献、下から四つ、吉田敏弘さんの「讃岐国善通寺一円保差図」という参考文献が出ておりますけれども、この中で作成されているトレース図になります。ただしそのトレース図、ちょっと誤りが若干ありますので、それ、私のほうが画像で少し補填しております。これですね。もうちょっと具体的に言いますと、吉田さんの作成した図では、なぜかこの、絵図と比較していただければおわかりかと思えますけど、ここに水田が描かれているのですが、吉田さんの作成した絵図だとなぜかここが欠落しているんです。で、***だけです。基本的に吉田さんのお作りになった図を使わせていただいているということですね。それから2枚の地図をお配りしてありますが、これ国土地理院の地図になります。地図の話、少しあとでもお話ししますが、現代、ちょっと昔でしたら、こういうある程度の正確な情報をお話しするときには、国土地理院の大体2万5000分の1、およそ(?)2万5000分の1の地図を使うことが通常だったわけですけど、今、地図を見る環境も非

常に変化しております。その辺、少しあとでお話ししたいと思います。今日はちょっと、本論に入っていきます。今日、もしかしたら少し専門的なお話が出てしまってわかりづらくなってしまいかもかもしれないんですが、あんまり***ことをお話ししたいと思います。で、私が今、関心を持っているこの普通寺周辺地域、大変重要な地域だと思ってます。それはどの点において大変重要なかっていうのを少しお話ししたいと思います。まず初めにレジュメに即してお話ししていきますと、歴史的景観の現在地ということですね。歴史的景観っていうのは、ただ単に、こういうところが由緒があって何か大切なとこだねっていうだけではなくて、最近はこれを保存していかなければいけない。そうしないとどんどん環境が変化してしまっていて変わってしまう。そういうところをちゃんと記録するなり保存していこうっていう動きが非常に強くなってます。これは今に始まったことじゃないんですけども、実は(?)戦後の高度経済成長のときからそういう動きがあったんです。まず戦後にいろいろ大きなこういう地域保存、地域の歴史的景観を保存していこうという動きが活発化するきっかけになったのは、いわゆる全国的に広まった圃場整備事業ですね、圃場整備事業。こちら皆さん、圃場整備事業は恐らくかかわった方も多んじゃないかなと思いますけれども。どういったことかといいますと、戦後の耕地改良(?)の、例えば、これちょっと引きますけど、今、Googleの地図出してますが。ちょっとこれたまたま私のエン(?)が。大分県の豊後高田市、国東半島の事例でちょっとお話ししますが、これ雑談レベルの話なんでレジュメには載せておりませんが。私たちが、今、通常、大体地域で、今回(?)、農村景観が見れる風景っていうのは、こういうふうに大体長方形とか正方形で区画された水田景観、これ通常のあるパターンですね。ところが普通寺近辺みたいな古くから開発された、いわゆる条里地割が古くから整備されたところは別なんです、通常の普通のとこですと、大体もともとがこんな長方形とか正方形の水田になる、ばーんって展開してるっていうところは少なかったんです。もともとはいろんな、地域社会っていうのはいろいろと微高地とか、土地の高低差とかがあったりして、その高低差に従って水田っていうのは少しずつ少しずつ切り開いていくわけですね。これ、今、比較したいと思いますけども。わかりますか、この地域とこの地域、少し異なることをお気づきになりますかね。こういう***、つまりこっちが長方形、正方形で整備された水田が広がっているのに対して、何ていうか不整形な水田がばーんと展開してるわけですね。ゼンケンガイ(?)の水田景観ってむしろこういうほうが通常の在り方ですね。ところが戦後に、大体こういううねうねしたあぜをぶっ壊して、ブルドーザーが壊して、きれいに長方形とか正方形とかにしていくわけです。こういう事業が戦後非常に広がって、大体、ちょっと正確な数字は把握してませんが、恐らく国土の、日本列島のほぼ99%ぐらいがもう土地改良事業していくわけです。だから私たちが普段見る農村景観っていうのは、これ古くからあるものじゃなくて、大体もう再編成された、ほとんどが再編成されたものですね。で、何でこんなことをやるのかっていうと、やっぱり古いうねうねしたあぜですと、トラクターが入れなかったり軽トラが入らなかったりとかいう、機械化の社会の中で効率的に生産をしていこうっていうところから、大規模な国が補助金を、国が自治体に補助金投入して進めていったわけです。こういったところから地域の景観っていうのはどんどん変わっていく、昔の景観がどんどん少なくなっていくっていうことで、日本

列島の古い景観っていうのはどういうもんだったのか、ちょっと保存していかなきゃいけないんじゃないか、記録していかなきゃいけないんじゃないかっていうことが広まったわけです。例えば水田経営されてる方だったらおわかりかもしれませんが、水田には、古くて、前近代の、それこそ極端に言えば田んぼ一枚一枚にさえ名前がついているようなそういうものがあって、そういう古い非常にミクロな地名***何とかっていうのも、この圃場整備事業で、この水田景観が再編成されるに際して消滅していく。通称名ですね、地域の通称名***消滅していったりする。あるいは私たちもお手紙とか出すときに、もう大字しか書きませんね。大字で何丁目何番何号ですね、***名っていうのももう実際に***しなくなっていて、小字名しかなくなっているという状態になってるわけですね。そうすると古文書読んでも、土地の名前が書いてあっても、どこのことかさっぱりわからなくなってくるわけですね。したがってそういうところから、そういう情報だっって(?)記録していかないといけない、あるいは景観だっても記録していかなきゃいけないとなるわけです。たまたま、今、見てるここは豊後高田市の田染という、田染小崎という地域なんですけど、いろんな事情で圃場整備事業が行われなかった地域なんですね。この地域、いわゆる重要文化的景観っていう、新しい文化庁が設定した文化財に登録されているわけです。その意味で、地域のいろんな情報を記録していく、保存していこうっていう動きが非常に、今、強まっています。ちょっとレジュメに即してお話しします。圃場整備事業に対する宣言ということで、1961年の農業基本法制定に伴う農業基盤整備事業の一環として63年頃から始まった圃場整備事業、耕地区画の規格化、用排水の改良、***によって改変される耕地の畦畔、あぜですね、微地形、あるいはその改変によって失われる恐れのある耕地の地名や呼称、さらにはミズヤクワリ(?)、スイリ(?)***、伝承などの早急な調査と記録を***必要性が叫ばれたと。60年代からこんなふうな動きもあったわけですね。しかしあんまり、そんなに当時は進まなかったわけですね。1980年、大分県の国東半島、今のちょうどお見せしてるところがそうですけど、の、組織的系統的な荘園調査、中世の景観復元研究というのが進められました。こういうものが、この場合ですと中世の荘園村落遺跡というふうになりますけども、いろんなかたちで文化財登録が行われていくようになっております。重要文化的景観の設定、2004年、文化財保護法の改正に伴って新しい指定文化財の枠組みとして重要文化的景観っていうのが設定されます。この田染小崎も、今、重要文化的景観に指定されております。そこでは地域における人々の生活または生業及び当該地域の風土により形成された景観地で、わが国民の生活または生業の理解のために欠くことのできないものというふうに定義されております。重要文化的景観の第1号は、滋賀県の近江八幡の水郷ですね。2006年に指定されております。現在63件指定されているわけですね。つい最近ですと、比較的歴史は浅い、歴史が浅いっていったらあれなのかな、東京の葛飾区の柴又が重要文化的景観に指定されて。あれは恐らく江戸以来の街並みがある程度残っているということに加えて、山田洋次さんが監督されていた『男はつらいよ』という映画がございませんですけども、ああいうので、段階的なんですけど地域社会の記録がなされているというところが恐らく評価されているんじゃないかなというふうに思いますね。マル「2」番にいきますね、景観復元研究の最前線になりますね。こういうものを復元していくに当たってどういうことが、今、い

ろんな自治体であるとか、あるいは研究者のほうで行われているのかっていうことですが、少しだけお話ししておきたいと思います。こういう地域は、地域丸ごと文化財登録していくわけですね。つまり今までの重要文化的景観っていう枠組みが成立する以前は、単体の仏像で国宝あるいは重要文化財とかそういう指定のされ方がされていたわけですが、そうではなくて、もう地域丸ごと、水田もそうだし、お社（やしろ）とか、あるいは里山とか、そういうものをセットにして文化財登録をしていこうという、そういうところですね。これは言うまでもなく恐らく世界遺産を意識したような登録の在り方なわけですね。研究者なんかは、こういう地域調査、あるいは調査に基づいて記録をしていくときにどうやってやるか。マル「2」の景観復元研究の最前線っていうことですね。資料情報や地域の歴史情報のデジタル媒体化や、デジタルベース（？）の充実化に伴って、歴史情報の所在地域では中世のみならず近世以降の地域に関するさまざまな情報、こういったデータにもありますね、を、デジタル地図上に記録をしていくということが、今、盛んになっています。先ほどちょっと私も出しておりましたが、これも私がこっち来てからいろんな地域歩いて記録していつているわけですね。こういうことがいろいろと、コンピューターIT技術作って行われるようになってます。これはGoogleマップあるいは国土地理院の地図などに直接オンライン上で記録して、自分で地図を作ったりすることもできますし、それからその情報を公開していくことができます。例えば東大が、史料編纂所がやっているのが、こういう、まさにこのレジュメに書きましたような歴史情報っていうのを、オンライン地図上に全部データをぶち込んでいこうという作業をやってます。これ今、データです。今、地形的に公開されているのは、拓本です。石造物の銘を拓本取ってその情報を、中世の石造物っていうのは、どここの日本全国にどれだけありますよっていうのは、こういうふうにマップで示していくわけですね。これを試験的に行っていくわけですね。だから将来的には、例えばこれ国の指定になっている***文字ですけども、こんなふうに拓本データ、それからそういう内部に文字が刻まれているからっていうようなことですね。公開していくわけですね。例えば古文書だって（？）、この地域にかかわる古文書があればその古文書データっていうのも、どんどんレイヤーで乗っけていく。だからインターネットでこの地図を開けば、どこにどういった歴史情報があるのかっていうのは一発でわかるようにしようっていう試みが、今、始まっています。ただこれ全部完成するにはかなり膨大な時間がやっぱりかかるわけですね、今、それが始まったばかりだということです。ただいろんなところで研究者がこういう動き、連携して進めていて、例えば国立歴史民俗博物館なんかでもこういう方法を取ってやっていますし、そういう研究機関だけでなく、個別の研究者が情報を蓄積して、それを例えば自治体とかに、これどうぞ使ってくださいと、何かためになるんだったら使ってくださいっていうふうに情報を提供していく、そういうことも行われたりしております。で、***もそうですね、こういう地域的な、地域の歴史的景観をどんな方法で保存していくか、どういう、今、学会や自治体で動きになってるか、お話ししてきたのは、言うまでもなく今日の論点に少しかかわるからなわけですね。もう少し言うと、この善通寺近隣地域っていうのも、歴史的な景観として何か保存すべきところというか、***あるわけですね。そういったところを目標に、これは、***いろんな活動をしていく必要があるんじゃないかという話が少しかか

わってくるわけです。それが3枚のところを書いてありますね、讃岐の国善通寺周辺の歴史的価値。香川县域で希有な中世資料を、荘園絵図資料を残す地区、明治時代以降の公図や行政文書（もんじょ）、行政文書（ぶんじょ）ですね、空中写真などを残しております。圃場整備事業や宅地開発以前の景観も***景観復元（？）可能な地域です。幸いなことに、陸軍ができて自衛隊ができたり、いろんな、護国神社ができたりと、大規模な改変も所々行われていますが、先ほど言及しました圃場整備事業っていうものが実はこの辺あんまり行われてないんですね。それは比較的早くから土地、水田化、効率的な水田区画というのができあがっていたところが大いんだと思いますけどね。そんなところから、恐らく中世から今につながる歴史的景観、これを段階を追って、この時代は善通寺周辺地域はこういう景観でした、江戸時代はこうでした、明治時代はこうなってます、段階的に明らかにすることができる非常に珍しい地域であると思っております。そんなことから、これからいろんなことをしていく価値があるとこだというふうに考えてます。2点目のとこですね、マル「3」の、併せて、お寺の中から数万点規模に及ぶ古文書が、今、発見されて、いろんな調査が行われています。今日お話するのは、江戸時代のお話というのが空白になってしまっていて、江戸時代のこの善通寺近隣地域っていうと、もう少し不透明なところがあるんです。それは、ただ、これは（？）、それは（？）今後この発見された数万点強の資料から恐らく明らかになってくるだろうと私は思っております。その資料については愛媛大学や香川県立ミュージアムを主体とした整理、調査が、今、進められております。本題に入っていきたいと思えます。ちょっと前置きが長かったですね。***ちょっと***。善通寺並びに寺領絵図を読むですね。少し画面見にくいかもしれませんが。鎌倉時代、もしかしたら遡ると平安末期ぐらいにいくかもしれませんけれども、遅くとも鎌倉時代には作られている絵図ですね。これについて。これがあるというのは大変貴重なことでして、中世の地域社会を描いた地図というのは日本列島で300点ちょっとぐらい、超えぐらいあります。ただ、中世っていってもやっぱり多いのは室町時代とかが多いんですけど、鎌倉時代のものっていうのは非常に貴重です。実は私はこの香川大学にくる前から東京大学の史料編纂所の画像解析センターというところで、まさにこういう荘園絵図を研究する部署にいました。ですから、かねがねこの資料についてはよく知っておりまして、現地に行ってみたくとか、実際にこの資料も見たいとかねがね思ってきたわけです。この絵図の検討に移る前に、善通寺領について少し基礎的な情報を整理しております。レジュメに整理しております。マル「1」番、善通寺領。***善通寺領は大体、平安時代の終わりぐらいに作られました。ただし領域設定が行われたあと行政とちょっとトラブルが、税金の、国役といわれる***ね、も、まあ税の一種ですね、巡って対立が繰り返されました。その後、1221年（？）、鎌倉時代の承久の乱が終わったぐらいの時期、改めて善通寺領確定します。これ、善通寺、曼荼羅寺領ってここに挙げましたが、中世において大体善通寺と曼荼羅寺っていうのはセットで表れることが非常に多いです。で、この善通寺領確定、比較的安定していくに際して、善通寺の本寺であった京都の東寺ですね。いずれも空海さんゆかりのあるお寺ですけども、東寺長者、東寺の長官を務めていた親玄さんという方がいましたけども、この人が東寺長者、東寺の長官を務めると同時に、随心院という、今でもお寺ありますね。ちょっと醍醐寺のほうにな

ります。醍醐寺のちょっと北あたりですかね。大和街道を少し上ってったところですね。あの辺は結構、真言密教の中核になるような土地、地域ですよ。密教の法流で小野流っていう法流がありますけども、あの小野という地名もその辺に確かありますね。現在に至るまでこの善通寺と随心院というのは非常に密接な関係を持ち続けております。次も基礎的な情報ですけども、大体この善通寺領、ジヘン(?)領と呼ばれますけども、どれぐらいあったのか。それが平安時代の帳簿が残されていてわかります。ちょっと細かいところは飛ばしまして、一番下のところ。23町3反、これは田、水田ですね。それから畑が68町という、畑が若干、数的には優位の帳簿になると思いますが、ただ、これ、最近の研究では、このときの帳簿は水田、田が27町、畑が68町、なってますけども、これがずーっとそのままの状態であるかというところではなくて、例えば、水が少ないときには畑にする、水が豊富なきには水田にできるというようなところも、これは年によってあるわけですね。これは、ですので、固定化された数字とは考えられないわけですね。今、一応そういう基礎情報を整理しました。次、絵図、ちょっと見ていきたいと思います。この絵図、いったい何が描かれているかちょっと見ていきますね。まず絵図がどんなふうに来ってきたのかという話からですね。これ善通寺領を描いた絵図ですので、ずっと善通寺にあったのかというところではない。ちょっといきさつが複雑です。伝来の経緯です。この絵図には絵図の由来を示した由緒書きというのがつけられています。

(問)

守田

いちいち読みませんが、重要などだけ報告、レジュメに載せております。明治40年に、明治40年の段階で、先の住職、前住職であった佐伯法蓮さんが記した由緒書きになっているわけですね。ここで絵図について具体的に書いてあるわけですけども、この図は随所院の宝庫にあり、ほご同様にしているを見だし、新たに表装して善通寺宝庫に納めた(?)というふうに書いてあります(?)。もともと京都の随心院に納めてあったわけですが、ほご紙同然のような扱いになっているので、これはちょっとどうかということで、表装して善通寺の宝庫に納め***、持って帰ったというふうにかかれてます。それから、この絵図には裏書きがあるんですね。そこには年号なんかも入っていて、絵図の在り方考えるうえで非常に重要な情報が書かれていますね。善通寺、ちょっと残念ながら欠損があるんですが、善通寺何とか何とか、これ、絵図ですね。図はいわゆるセイズ(?)、イタジ(?)ですね。私たちが使っている図という字とはちょっと違いますが使われています。徳治2年、これ、直すと1307年に装丁しますね。當寺百姓烈参のときこれをまいらすというふうにかけております。この絵図というのはどうやら善通寺のお百姓さんたちが何か烈参する、烈参するっていうのは、何事か訴えるために参上するわけですが、そのときにこの絵図を進上したんだ。どこに進上したか。これは恐らく京都の随心院だろうというふうにかえられているわけですね。明治40年まで京都随心院に納められていた。その納められる契機になったのが、この當寺百姓烈参なのであったっていう考え方が濃厚になっております。ただし、これはそのときに、徳治2年に作成したとは書いてない。そこがちょっとみそなんです。あとは、この図を随心院に持ってったのが、まいらしたのが徳治2年であるということですね。それから、ここにちょっと違った筆で墨書が***ますね。墨の色明らかに違いますね。一円保差図って書

いてますね。一円保ってという言葉はいわゆる善通寺領のジヘン（？）領、これからお話しするジヘン（？）領の別名、別称でございます。ちょっと墨色が異なる。どういうわけかちょっと不可解な文字が刻まれていますけど、これもいろんな議論があるわけですけども、ムナカタニユドウ（？）さん、ムナカタニユドウ（？）なんで僧侶って読む（？）べきですかね。ちょっとどういう意図なのかわかりませんが、ある。これも、まずこの裏書きが書かれた順番はどういう順番で書かれたのかっていろいろと議論があるところなんですけども、どうですかね、皆さん。お考えがあったらあとでお話しできたら***。これが一番最初に書かれたにしては、この文字っていうのはこっちに寄ってないかなというふうに、印象もありますよね。もしこれが最初に書かれていたら、ちょっと近くないですか、文字。もうちょっと余裕持たしてこちら辺から書きたいと思うんです（？）。これが最初にあって、で、空いたスペースに、何かそこ、考えたことを書こうってなったときに、ここでもう予測が、こんなきつきつになるとは予測できなくて、ここが少しこの幅に比べたら詰まっちゃったって考えるほうが自然かなあというふうに思うんです（？）。ちょっとこれは***なんで、なかなか実証は難しいですけどね。そんな議論ですね。表のほうに入っていきますけれども、いろんな文字、善通寺の伽藍が描かれていたり、あるいは、今の有岡の大池が描かれていたり、いろいろあるわけですけども、在家描写ですね。これ、70カ所を超える文字表記がございます。細かく見ていくことはできないんですが、いくつか分類できそうなんです。どうも全体の描写とセットになる根本的な文字表記っていうのが、こういう、あわちとのとか、くらのまちとか、田ところとか、これ、お寺の有力者***かね、さんまい。善通寺で三昧僧っていうと一つのステータスとして中世***成立していた階層ですけどね。あるいは、そうしやう、ししうなんていう善通寺僧とおぼしき表記ですね。こんなものが恐らくこういう条里方格線ですけど、地割になる***ね。墨色的にも、墨色と比較してもなじみのある、親和性のある表現に、表記になってますね。それからもう少し絵図の北のほう、北側にいくと、漢字表記の文字がいろいろとございますね。もうちょっと***。この墨色というのは少し違和感がある墨色になっていて、書き手が違うからなのか、それとも書く時期、記入された時期が違うからなのか、これはなかなか難しいところがありますけども、主にかなで書かれたこういう表記ですね。東南地区に集中するこういうかな文字の文字表記とはちょっとニュアンスが違っているというところですね。主にこの二つに筆跡というのが分かれるわけですが、あと細かいところを見ると、その2者にいずれも属さないような文字表記もいくつかございますね。かつねたにとか。この辺は今でもカツネダニ（？）っていう地名があると、この辺にちょうど有岡大池のところにあると思いますけれども。それから、これ、初めにお話ししたほうがよかったかもしれません（？）が、絵図の構図として南を上、天にしていると。それから中心に善通寺の伽藍を描いている。この伽藍についても実は細かくお話ししたいところもあるんですが、恐らく、この伽藍、このてくてくワークショップの中で善通寺だけ（？）についてお話があった回も、史談があった回もあると思うんですけど、この辺がふれられましたかね。大変これも興味深いんですけどね。例えばこの***のところなんかは五輪の塔なんか描かれておりますけれども、この五輪の塔なんかは、今、お寺の中のどっかの五輪の塔に相当するんじゃないかと***

考えてますが、確定にはなかなか難しいですか（？）ね。一説には弘法大師、空海さんのお墓なんじゃないかという指摘もありますけど。それから、善通寺伽藍が真ん中になるように描かれていると。この条里方格線が恐らく定規なんかを使って描かれている***。ところが同じ条里の方格線でも、曼荼羅寺のほうは、西のほうにちょっと目を向けると、どういうわけかこちらのほうはフリーハンドなんですよ。こちらは明らかに定規なんかを使ってると思われるんですが、こっちのほうはどうもフリーハンドだ。これはいったいどういうことなのか。何か意味があるのか。意味があるのではないかという、考える人もいますね。いや、そんな意味はないだろうって言う人ももちろんいるわけですが。じゃあ意味があるとしたらどんな意味があるのかですね。面白いことに、これ、何でもない今の Google の空中写真ですね。

(問)

守田

こんなことを話していると時間がなくなってしまうんですが。(笑)。昔ながらのこの善通寺周辺地域の条里線、地割というのは全体見ればおわかりになる、このラインですね。45度ぐらいですかね、このラインなんです。共通してるんですね。これは恐らく昔ながらの地割ですね、この辺は。ところが曼荼羅寺のほうだけ見てみると、このラインですね。曼荼羅寺の周辺だけ見ると、ちょっと角度が違うんです。空中写真***、地割がね。おわかりになりますか。若干角度が低くなってるといいますか。これを示しているのじゃないか(？)。微妙なこの違いを示しているのではないかというふうに考える人もいます。ちょっと定かではありません。それから絵図のほう見ますけども、これに線が引かれていて、ここで、さかいのみちって書いてますね。恐らく善通寺領の結界、境界を示すラインですね。ちなみにその境界というのは、この条里方格線が描かれている、南側のこの線とか、東側のこのライン、これも***境界なわけですね。したがって、善通寺領のジヘン(？)領の区画を示した図であるということは間違いのないわけですね。それから水源についてですが、水路がいろいろと描かれております。雨が大丈夫でしたらちょっとあとで歩きたいと思えますけれども、非常に墨跡が乱雑で、ちょっと違和感がある感じがしますね。これ後筆なのではない***、つまりあとから書き加えているのではないかという考え方、これが、今、濃厚になっておりますけども、***。とりわけ有岡の大池ですね。この辺が絵画的な描写が非常に趣がある描き方をされてるのに対して、子どもがお絵描きしたような、ぐちゃぐちゃとしたような、塗りつぶしたような筆記になってますね。この辺やっぱり違和感っていうのはちょっと否めない。これはどう考えるべきなのか。これは研究者もいろいろと頭を悩ましているところですね。***ね、非常に粗雑な筆使いなんです。そういうところは注目されますね。それからもう1本の水源がありますね。どうやら善通寺領にどんなふうに入ってきているのか、これを、恐らくは、この筆は示したいということだと思います。ちょっとその辺にしときましようか。全体的な構図を見ました。それから先ほど少し見ましたが、善通寺のお坊さんらしき名称が出てくるのがこの東南地域の方格線ですね、集中している。この北東あたりには漢字表記の、どうやら農民、族人の、恐らく有力農民を示したと考えられるお名前っていうのが散見されてたりしますね。それから、中世の絵図にはありがちなことなんですけれども一応指摘をしておくと、この有岡の大池から流れる水路、これは実際の距離感からするとちょっと短い格好で描かれてお

ります。これは言うまでもなくデフォルメされてるということですね。こういうのはよくあることですね。以上、基礎情報を整理しました。絵図から地域社会を読み取っていくと(?)、これ先ほども指摘しましたが、絵図には条里方格線が定規なんかを使って直線で描かれた地域と、どうやらちょっと地割的にも少し違う、曼荼羅寺より西のほうの地域、ちょっと区分されるだろうというところが読み取れます。それからもう一つ大変重要なんですが、繰り返し指摘しております、今、市街地化されている東側ですね。東側でも南のほうが善通寺僧らしき人々の邸宅なりが展開しているという地域、北側が有力農民なんかが集約するような水田が展開してる地域いうふうに考えられるわけですが、実はこれ、先ほど勉強しました平安時代末期、久安年間のツキヨミガイネン(?)の土地ショウブン(?)にはどうも、この南側の地域というのは比較的安定した高地、土地になっているのに対して、この北側っていうのは例えば水損、ちょっと水浸しになってしまって、スイサンカが(?)上がらない(?)とか、あるいは荒田、荒廃してしまうと、そういう水田っていうのは少し多かったということですね。ちょっと一線を画すところがあるようですね。そういう地域差みたいなものが見えてくる。お寺にかかわる有力者が中心的に住まう場所と、通常の一般的な住民が住む場所っていうのが恐らくある程度区分けされていたのではないかというふうに考えられますね。こういう文化というか違いが(?)みたいなもの、何かしらの格好で現代に引き継がれている可能性がないのか何とかがっていうのを少し考えたくになります。例えばお祭りの在り方が少し別になってるとか、そういうかたちで現在も何かそういう区分けみたいのがあるかどうかっていうのをちょっと考えてみたいところがありますね。これはあとで少しかかわるお話しですけどね。マル「4」番、ちょっと急いでいきたいと思いますけども、絵図の作成の経緯と目的っていうことですね。この絵図が何のために作られたのか。遅くとも鎌倉時代1307年にはもう確実に作られているこの絵図、何のために作られたかっていうこと(?)ですね。絵図、裏書き先ほど見ましたけども、徳治2年、1307年に農民が随心院に参上している。それ以来、恐らくは随心院にあって、明治40年に善通寺に戻ってきたんだということ***。実際にこれが作成された経緯っていうのを考えなければいけないと。もちろんこの徳治2年に作成してそのまま随心院に持っていったっていう可能性も全くゼロではないのですが、考えるべきはまずこの絵図に何が描かれているのか、いうことを考えてみると、繰り返し話しますように、この絵図全体の描写の目的は明らかに寺領全体を示すことである。それから、この寺領全体を示すことと、それと、しっかりと描かれているのが、やっぱり絵図が作成された当初から恐らくあった表記、あわちとのとか、さんまいとか、そうしやうとか、根本的な表記ですね。お坊さんの在家、根拠地ですね。こういうものが描かれた意味っていうのを考えなければいけない。ということ考えたときに浮かび上がってくる資料がたくさんあるんですね。実は先ほど最初に基礎情報として整理しましたが、平安時代の終わりに善通寺領が確定した頃、国の役人と非常に税の負担を巡ってもめていたっていう話をしました。この1番のマル「1」のところ、善通寺領の成立っていうと少し見えますけども、ホウエイ(?)の成立。ただし、寺家、諸寺(?)、三昧僧及び在家住人ら、これらに対する税の負担を巡って、繰り返し繰り返し、もう50年ぐらいにわたって争ってるわけです。まさにこの絵図見ると寺領全体を示す。そして、三昧僧、寺家、諸寺(?)ら、僧正

とか、諸寺(?)っていうのは役職に就いているお寺のお坊さんということの意味はすけど、まさにそういった表現がなされているわけですね。ししう、さんまい、そうしやう、くないあしやり、そうつ***ですね。恐らくお寺の幹部クラスの非常に地位の高いお坊さんたちのこういう表現、在家描写がなされているわけですね。こういったところから、何年に実際に絵図が描かれたの?というのは確定できないにしても、恐らくこの寺領を確固たるものとして認定してもらうに際して絵図が作られた可能性が高いというふうに、今、私は考えております。こういった中世に描かれた荘園絵図っていうのは基本的に何か訴訟があったり、寺領を認定してもらうとか、要は境争論(?)とか、隣村と何か争論がありましたときに絵図を描いたりします。これ、中世人の独特の感性なのかわかりませんが、単純に私たちが地域を把握するために地図を描くっていうような発想って実は中世人にはないんですよ。目的があって必ず描かれる。必ず描かれるときも、さっき見た、ディフォルメがされるわけですね。ちょっとバイアスがかかった描き方を***ですね。などこから、そういうところも含めて、恐らくこの絵図の描写の中心になっている寺領全体の描写、そして、寺僧、お坊さんたちの在家描写が描写の中心になっているところから、これの認定にかかわる際に、かかわる問題で作られたものだというふうに私は考えております。これまでほかにもいろんな説が出されております。例えばこの有岡の大池を造るための計画図なんではないか、いう議論もあつたりするんですね。そういった可能性はもちろんゼロではないんですけども、いわゆるこういう水路を造るための絵図って、中世絵図っていうのはもうたくさん実は残っているんですね。しかしこんな細かい表現しませんよ。ちょっと見まじょうか。私は前の職場の関係上、そういう全国の荘園図の***画像データを持って***が、例えば、

(問)

守田 これでも非常に、これは今、***かな。嵐山の渡月橋からずっと桂川下ってくるわけですけども、そのイゼキ(?)についてのいわゆる指図といわれるものですね。まだこれでも細かい、きっちり描いてるほうです。いわゆる用水指図といわれるものはもう、こんなのは典型的かな。

(問)

守田 風景なんて描きません。これぐらいが普通です。これ、松尾大社の前の、これも同じく桂川の用水、水路に水を分けるときの図ですけども。ですので、もしかしたら有岡の大池を築造するときに再利用された可能性はあるかもしれませんが、絵図当初の作成目的であるとはとても考えられないですね。ちなみに、再利用された可能性について今お話ししましたが、中世の頃、絵図が再利用、再々利用されることっていうのがたくさんあります。もともとこれが第1段階で役目を終わりました。そしたら捨てちゃうんじゃなくて大切に取っとくわけですよ。次にその図を使って便利だなあということで、何かのときに再利用されるっていうことはよくあります。これ実例がたくさんあります。著明な例で言ったら、和歌山県の紀伊国に栲田荘絵図という大変有名な絵図がありますが、あれなんかが代表的な例だと思いますね。ということで、再利用されたときに、私の考えでは恐らく、かなり、平安時代の末期か、あるいは鎌倉時代の最初のほうか、断言はできませんけど、寺領の認定にかかわる、あるいはお寺のお坊さんたちがどれだけ国役を勤めるかっていう問題にかかわってこのまづ絵図が作られた。どういうきっかけかわかりませんが

も、もしかしたらこの大池を造るときの計画図になったかもしれませんが、いずれにしてもこの裏書きをリスペクトっていうか、尊重する場合には、徳治2年、1307年には随心院に何らかしらの理由で持ってったんだらうということですね。基本的な絵図の動き、そして内容について、私は今そんなふうに理解しております。皆さんのほうに何かご意見あったら***ていただけますか。で、2番のほういきます。ちなみに、今日やっぱり外のほうが小雨、雨がちょっと降ってるということで、巡見のほうは残念ながらできないようです。またこういう機会がありましたらぜひ行きたいと思います。じゃあお話続けていきます。中世善通寺領の2番ってということですね。現状と比較してまいりたいと思いますね。景観に刻まれた中世の記憶ということで、有岡の大池、有岡の大池は皆さんもなじみのある池だと思いますけど(?)も、ちょっと絵図逆にしますね。この形の、有岡の大池の形、模したような形になっておりますけども、

(問)

守田 こちらですね。有岡の大池ですね。***。ちょっと***。こっちにしよっか。

(問)

守田 今でもこの大池の真ん中からソコヒ(?)、ヒ(?)が出て、水がごーっと流れるようにはなってますけど。こっち側にもヒ(?)がありますね。絵図見ますと、こっち側、真ん中にはありますけど、こっち側になってますね。ちょうどカン(?)条里(?)、この水路が基幹の水路なってるんですね。この水路がまさに、今、そこから(?)、窓から見える水路はこれに相当しますね。

(問)

守田 この水路ですね。弘田川に当たりますね。もう少し一度戻りますけれども、自衛隊がありますけれども、ここに弘田川こういうふうになってる。恐らくもともとはこんなふうになってたんじゃないですかね。恐らく流れ変えたんだと思いますけども、自衛隊。この弘田川、こっちの北のほうに向かっていく水路とは別にこっちの水路がまたありますね。これ、絵図でも、こう流れてきて、こういうふうに水路が描かれていますね。北に流れる基幹の水路があつて、さらにこっからこう北に流れる水路とは別に西のほうに***、東のほうに行く水路も描かれていますね。空中写真見ると確かにこの水路あるんですが、実はこの辺、言われてみればわかる(?)なんですけども、ここは実はこっちのほうが土地が高くて、こう流れてるんですよ、水が。現在***。

(問)

守田 こっからこう流れてる。こっち落ちてるんです、こっちからこう流れて。絵図はそれと矛盾しているわけです。こんなところから、こんな矛盾、絵図は明らかにこう流れてる***描いてる。こんな矛盾が生じるのは、恐らく、やっぱりこれはこの水路がないから、もともとなかったからなんだ、だからこれは計画図なんだっていう議論が***。本当だったらこういうふうにこう流れ(?)、水が流れているはずなのに、こんなふうには書いてる。こんなことは絶対に地形上あり得ない。こんな矛盾が生じるのは、まさにこの有岡の大池がなくて、これを造ったときにどうやって水を流そうか、計画してる図だからこんな矛盾が生じるんだっていう人が***。確かにそう言われればそうなのかも、その辺もなかなか難しいところですけどね。ただ、こういう絵図には矛盾とか描き間違いっていうのはつき物なんです。かなりつき物です。実際、例えば、この絵

図だけじゃなくて公文書にしてもそうです。書き間違えっていうのが常です。実は、でもこれは中世人だからではなくて、多分、私たち現代人もそうなんです。実は私、かなり、学生時代、東京の区役所の宿直のアルバイトしていたことがある。そこでは昼間に来れない人が婚姻届を出したり死亡届を出したりとかいうような便宜的な手続きをする窓口ありまして、そこにいたんですけども。で、いろんな書類見てきましたけども、婚姻届にしても何とか届にしても、完璧に誤りなく書いてる人ってほとんど見たことないです。今のそういう書面って、しかもフォーマットがあるだけで、名前とか自分がよく知ってることを書くだけなのに、それでも人間って間違えるんです。数字にしてどれぐらいかな、ほとんど、大体***間違えます。かく言う私も実は、散々そういう人の見ておきながら、そして書類時も熟知しておきながら、書き換えまで(?)します(笑)。そういうもんだと思うんです。だから、その辺はこれだけで計画図として使われたっていう説が成り立つかどうかっていうのはなかなかわからないところがありますね。ただ、そういうのがあっていうことは事実ですね。一つの可能性として。それから、描写で、現在、曼荼羅寺、これも大変有名ですね。曼荼羅寺近辺ですね。これはいちいち画像を提示するまでもないかと思えますね。お札所としても、今、たくさんの人でにぎわっている、善通寺***にぎわっているお寺ですね。平安時代後期から善通寺とともに京都の東寺の末寺となっていました。先ほど紹介しました平安時代の終わりの善通寺領の帳簿の中にも曼荼羅寺領がしっかりと描かれております。この辺はまあいいと思うんですけども、興味深いのが、曼荼羅寺の若干南に位置する文字表記ですね。そうついふくしのりやう所、横に小森って書いてますね。これはちょっと森になってまして。もうちょっと***。明らかに小森って書いてますね。これ現在地***ますと、

(間)

守田

ちょっと画像の転送が遅いですね。こっちか。実はここにミズヨケ(?)神社ですね。これ、音が正しいかが、ちょっと読み方正しいかわかりませんが、水分(みずわけ)神社、支社的ですよね(?)。恐らくそういう高地などに水を流す、水源に恐らく一時***かと思われまじけれども、神社がありますね。この神社の周辺の方にお話を伺いますと、このお社(やしろ)が今でも通称小森さんと呼ばれてます。間違いなくココであろうということ(?)ですね。この小森さん、この曼荼羅寺の存在する谷間で今でも唯一のお社(やしろ)となっておりまして、この谷地の人々、住民(?)の方々が氏子になっているという経緯です(?)。恐らくお社(やしろ)が一つということからしても、この信仰の在り方、信仰ケン(?)の在り方は恐らく中世に遡るだろうというふうに私は考えてます。それから、絵図でしっかりと描かれている文字表記ですね。曼荼羅寺のもうちょっと西側のほうですね。ゆきのいけの大明じんというふうに書いてますね。ゆきのいけの大明じんって書いてありますが、これも、これに相当するとおぼしきほこらというのが残ってます。

(間)

守田

出釈迦寺んところ、こういうふうには尾根になっているわけですが、これを越えて登っていくと、ここに今、イキノキ(?)明神と呼ばれるほこらがあるんです。これに相当するのではないかというふうに考えます。ゆきのいけの大明じんからイキノキ(?)大明神。うーん、苦しいですかね

(笑)。

会場 (笑)

守田 場所はまだ全く、この曼荼羅寺から尾根を一つ越えて登ったところということで、ぴったりなんですけどね。こういう議論がありますね。それから、絵図、東のほうに移りますけれども、なかなか面白い構造物が描かれてるんですね。ちょうど善通寺伽藍の、お寺の伽藍の北のほうに位置しますね。この条里方格線からすると、1、2、3、四つ目ですか。四つ目のところに笠塔婆の構造物が描かれております。これいったい何なのか。象徴的に何か描かれてますね。何かのランドマークのつもりなんです***。これは樹木のようなですね。文字ではない。ちなみに、補足、申し遅れましたけども、このワンプロック、これはいわゆる坪と呼ばれるもので、1辺が109メートルですね。

(間)

守田 「109メートル×109メートル」ということになりますね。だから、この伽藍の、お寺から100、200、300、350メートルぐらいということになりますかね。これ、ちょっと今の地図で考えてみますと、

(間)

守田 ちょっとちっちゃくなりましたけど、すいません。***。ちょっとわかりづらいか。これ距離を測れるんですね。お寺の、恐らくこの界線ですね。こっからですね。350メートルぐらいですとこの辺になるんですが、この辺にはあんまり何もないんですよ。ところが、もう100メートル、もう一つを越えると、ちょうど越えるぐらいだと(?)、

(間)

守田 こんなのがあるんですよ。犬塚と呼ばれる、地域一帯では恐らく著名な、だと思えますけども、もう少しちゃんとした写真。

(間)

守田 こういう。似てますね。ちょっとこれに当てはめたくくなりますけどもね。ただ一つのずれ***。こっちはない、こっちに、ここに描かれて***おかしい。これは、だから、さっきの話じゃないですけど、描き間違いと考えるかな、

会場 (笑)

守田 それとも全く別のものなのかが難しいところですね。これも(?)一つ議論になったりしておりますね。この犬塚と呼ばれるものですが、一応この在り方からして鎌倉時代の作成にかかるものというふうに一応考えられるということですね。こんなふうには絵図に描かれた、さまざまな、いろんなポイントポイントで現在に引き継がれてるところが結構あります。もう一つだけお話ししておきますと、例えば、この善通寺領の名残というか、在り方考えるうえで興味深いのは、もう一回言いますが、お寺がこうありますわね。で、3坪先がお寺の結界になるっていうわけですね。3坪先ということは330メートルぐらいですね。330メートルぐらいが境界になってる。330メートルどんな***なってるかっていう、また測りますけども、

(間)

守田 ちょうどこの国道の24号線がこうなってます。結構太い護国神社の前の道ですね。今でも結構重

要な道として使われてる道がありますね。あれが境界になって、恐らくもともとあの道というのは、人々に、非常に往来するうえで重要な道だったんだろうというふうに(?)考えられますね。そこが境界として制定されてるっていうのは興味深い***ですね。琴平のほうに行く、なりますね。そのほか、例えば絵図に描かれた、前半でちょっと話題の中心になりました、こういうお寺のお坊さんたちの在家描写、こういったところは先ほどのこういうの当てはめていけばピンポイントで、どこがどこの、三昧僧さんの方たちはこの辺に住んでいたとわかるわけです。例えば、この中でも興味深いんですけども、これはお寺のお坊さんではないんですが、田ところっていう表記がありますね。タドコロさんっていうのはこれもかなり地域の有力者。タドコロっていうと農民的なイメージを持つかもしれませんが、かなり地域の代表者っていうか、武的(?)な要素も持ち合わせているような人物かと思いますけども、こういったところ、タドコロさんの邸宅なんかも恐らくほぼピンポイントでわかるわけですね。

(問)

守田

ちょっとこういった***。こういうところは長期的に見て、発掘とか行えば何かしらが出てくる可能性、これ、邸宅の跡というのがはっきりと出てくる可能性が非常に高い、いうふうに思います。ただ、ご承知のように、門前町、もうビルが建ったり市街地化されてます。ビルが建ったりしてるところなんていうのは恐らくもうかなり深く掘削をしているところが多いと思いますので、そういったところはなかなか発掘も難しい、発掘の成果っていうのは出てこないと思いますけども、例えばこういう学校とか、何かしら成果が出やすいところなんていうのも恐らくいろいろありますので、今後、長期的に見てそういった作業っていうのを視野に入れていく必要があるだろうということですね。簡単にですが、中世の痕跡について少し見ていきました。最後ですけども、2番、善通寺周辺一帯の歴史過程ということですね。この地域が歴史的景観としてこれからある程度保存していくようなことが課題になったときに、課題になると私は考えているわけですけども、一つのメリットとしては、いろんな歴史的なもの、情報が残されている、そして、圃場整備事業なんていうのもほとんど部分的にしか行われていないことから貴重な地域になるだろう。それから、ここの(?)***明治時代の史跡図と呼ばれる図面が残っているわけですけども、

(問)

守田

そんなものとレイヤードさせてみてもほとんど改変が、護国神社とか自衛隊とか、そういう大改変が行われたところ以外ではそんなに地割に変化がないことが確認できます。今、全国の法務局には大体あるんですが、地籍図という、基礎改正のときに明治政府が作成した、通称公図とも呼ばれますけど、図面残っています。これは結構正確、まあ地域にもよるんですけどね、善通寺地域のものっていうのは非常に地割が正確なんですよ。こういうものと航空写真っていうのをレイヤードさせると、ほとんど変わってない。明治時代の在り方を大部分で継承しているということは、これ、もっともつと遡る可能性(?)、耕地一片一片についても遡る地域がたくさんあるということですね。通常、レジユメにも書きました、一般的に中性段階で既に水田化されていて、ある程度恒常的にもう再生産ができるような、なってるところっていうのは大規模な改変っていうの

は加えません、基本的には、中近世には、もうできちゃった。そんなことをしたのは戦後の圃場整備事業ぐらいです。今ある水田をわざわざブルドーザーで壊して、あぜも全部壊して作り直すなんてことは前近代の人はやりませんので、全部あるもの使うわけです。そういったことを考えれば、大体この辺一带は中世段階でかなり水田化されていて、早い段階で水田化されていますので、恐らく変わってないんですよ、土地の一区画一区画というのは。近代になって近代以降に改変が加えられてないところは恐らく変わってないだろうというふうに考えてます。となると、やっぱりこれは貴重な景観を残す地域として、いろいろと情報を記録していきなり、古い、それこそ水田一枚一枚の地名をちゃんと記録していきなり、できることはやっていかなきゃいけないだろうっていうふうに私は考えています。今後の課題のところでも話に入っておりますけども、この善通寺近辺の地域の歴史過程を今後もっとクリアにして、それからその重要性を発信していかなければいけないと思っておりますね。それにあたってのやっぱり今後の課題ってというのは、お話の途中でふれましたように、もう一つは江戸時代の段階の状況というのが少しわかってないというところですね。これは先ほどもふれましたけども、近年の江戸時代の資料がたくさん見つかったところから、今後成果が期待できるだろうというふうに考えております。そうすると、中世の段階、江戸時代の段階、明治時代の段階、それから現代の段階っていうふうに、この地域がどんな歴史過程をたどっているのかクリアにしていくことができるだろうというふうに考えております。私のほうからは以上です。ご清聴ありがとうございました。

会場 (拍手)

(ご指定箇所終了 01:31:50)